

「中高年の生活・住まいに関する意識調査」について

自立し、コンパクトに、モノにしばられず暮らしたい！

2018年11月7日
株式会社住環境研究所

積水化学工業株式会社 住宅カンパニー(プレジデント:関口俊一)の調査研究機関である株式会社住環境研究所(所長:小池裕人、千代田区神田須田町 1-1)は、このほど「中高年の生活・住まいに関する意識調査」を実施し、結果をまとめましたのでお知らせします。

超高齢化社会のわが国において、中高年の暮らしや住まいに対する意識や動向を把握することは、彼らのQOL(クオリティ・オブ・ライフ)を高めること、長寿命化の実現につながるヒントを得られるなどのことから、社会全体への貢献になると考えられます。そこで、今回は“家族観”、“暮らしと住まい”の観点から、2000年の調査とも比較しながら、どのような意識を持っているのか調べました。

調査結果のポイント

<家族観について>

1. 家族それぞれの自立度が高まる

● 「夫婦といえども一人の時間が欲しい」が増加

2000年調査に比べ「夫婦でも一人の時間ほしい」が12%増し、「夫婦共有の時間を多く」は19%減となっていました。年齢別では、「一人の時間ほしい」は定年前後の55~59才、60~64才で高ポイントとなっていました。性別では、男性より女性で「一人の時間ほしい」が多く、いずれの年代でも男性より女性の方が多くなっていました。

● 「家族一人ひとりの生活尊重」「子は自立すべき」も増加

2000年調査に比べて、「ひとりの生活尊重」が17%増となり、「家族のまとまり第一」は27%減となっていました。また、同様に「子は自立すべき」が10%増となった一方で、「結婚してもいっしょに暮らしたい」は19%減となっていました。

2. 自立度アップの背景は中高年の元気化

● どの年代も「あと10年仕事を続ける」、就業年齢は上昇傾向

50代(現在有職)は「60代まで仕事を続ける」が75%で、うち65-69才が49%となっていました。60代(現在有職)は「70代まで仕事を続ける」が51%、70代(現在有職)は「80才以上まで仕事を続ける」が53%となっていました。

● 定年後に向けて「体力」「生きがい」の準備

6割以上が定年後の生活に向けて何らかの準備をしていることが分かりました。内容は、「趣味・生きがいづくり」「体力づくり」は3割超で最多となり、次いで「生活費試算」「退職金」など入出金関連が約3割弱、「脳トレ」も2割超となっていました。

<暮らし・住まいについて>

3. モノを持たない暮らしの志向が増加し、住まいの縮小望む

● 「すっきりシンプルに暮らしたい」が増加

2000年調査に比べ「すっきりシンプル」が13%増、「モノをとっておく」は36%減となりました。

● 「広い家に住みたい」よりも「コンパクトな家に住みたい」が多数

「どちらともいえない」が多くを占めるが、「今よりコンパクトな家」希望は20%、「今より広い家」希望は16%となり、住まいの縮小希望が多くなっていました。住居形態別では、特に持家戸建て層では住まい縮小希望が多くなっていました。

調査概要

中高年の生活・住まいに関する意識調査

調査目的: 家族価値観・生活価値観の時系列変化等を捉え、今後の住行動トレンドを探る

調査対象: 50才代以上、既婚、男女

調査エリア: 全国(首都圏・愛知県・近畿圏 53%)

調査方法: インターネット調査

調査時期: 2018年9月

有効回答: 1,180件

<比較データの概要>

調査対象: 50才代以上、既婚、男女

調査エリア: 全国(首都圏・愛知県・近畿圏 54%)

調査方法: 郵送アンケート調査(総合住宅展示場来場者)

調査時期: 2000年

有効回答: 545件

調査結果の概要

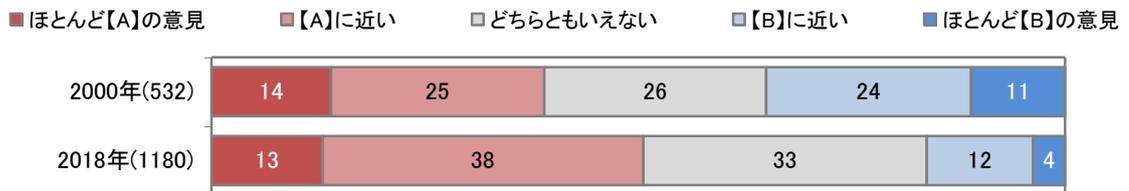
<家族観について>

1. 家族それぞれの自立度が高まる

● 「夫婦といえども一人の時間が欲しい」が増加

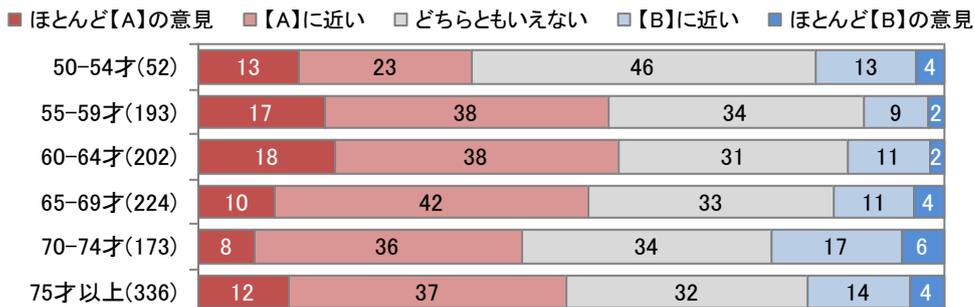
夫婦に関する意識を調べるため、【A】「夫婦といえども一人の時間がほしい、それでこそ仲良く暮らせる」と、【B】「会話があってこそ分かり合える、共有の時間を多く持ちたい」の、いずれを希望しているかについて調べました。2000年調査では【A】系統(「ほとんど近い」と「近い」の合計、以下同じ)が39%、【B】系統が35%と比較的均衡していましたが、2018年調査では【A】系統は51%、【B】系統が16%となっていました。

【A】夫婦といえども一人の時間がほしい、それでこそ仲良く暮らせる
【B】会話があってこそ分かり合える、共有の時間を多く持ちたい



年齢別では、(A)系統は定年前後の55～59才、60～64才で高ポイントとなっていました。また、性別では、男性より女性で(A)系統が多く、さらにいずれの年代でも男性より女性の方が多くなっていました。

<年齢別>



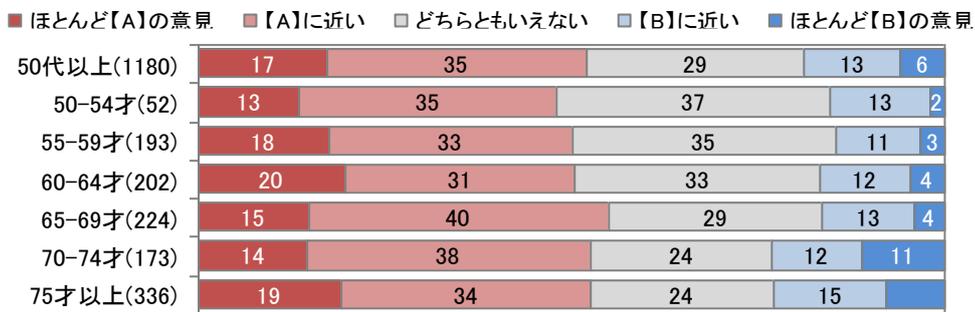
<性別>



さらに、今回は新たに、【A】「夫婦それぞれ個室やスペースを持ちたい」、【B】「夫婦の寝室や居場所は一緒にしたい」という2種類を用意、就寝やくつろぎの環境の有り様についてどのような傾向にあるのかも調べました。いずれの年代でも【A】系統が多くなっていました。また性別でも同じ傾向でしたが、女性の方が若干【A】系統を選ぶ傾向が強まっていました。

【A】夫婦それぞれ個室やスペースを持ちたい
 【B】夫婦の寝室や居場所は一緒にしたい

<年齢別>



<性別>



● 「家族一人ひとりの生活尊重」「子は自立すべき」も増加

家族に関する意識調査として、【A】「家庭では家族ひとりひとりの生活を尊重したい」、【B】「家庭では家族のまとまりを第一に大切にしたい」のどちらを希望するか調べました。2018年調査では、【A】系統が44%（2000年調査では29%）と高まり、【B】系統は27%（同54%）となり低下しましたことが分かりました。

【A】家庭では家族ひとりひとりの生活を尊重したい
 【B】家庭では家族のまとまりを第一に大切にしたい



また、子供に関する意識についても、【A】「子供は社会人になったら自立すべきだ（家を出るべきだ）」、【B】「子供が結婚してもできればいっしょに（近くで）暮らしたい」、から傾向を探り、2018年調査では【A】系統が50%（2000年調査では40%）と高まり、【B】系統は13%（同32%）に低下したことが判明しました。

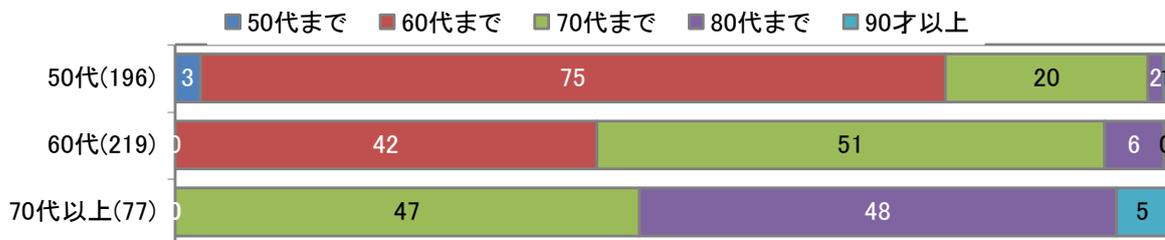
- 【A】子供は社会人になったら自立すべきだ（家を出るべきだ）
 【B】子供が結婚してもできればいっしょに（近くで）暮らしたい



2. 自立度アップの背景は中高年の元気化

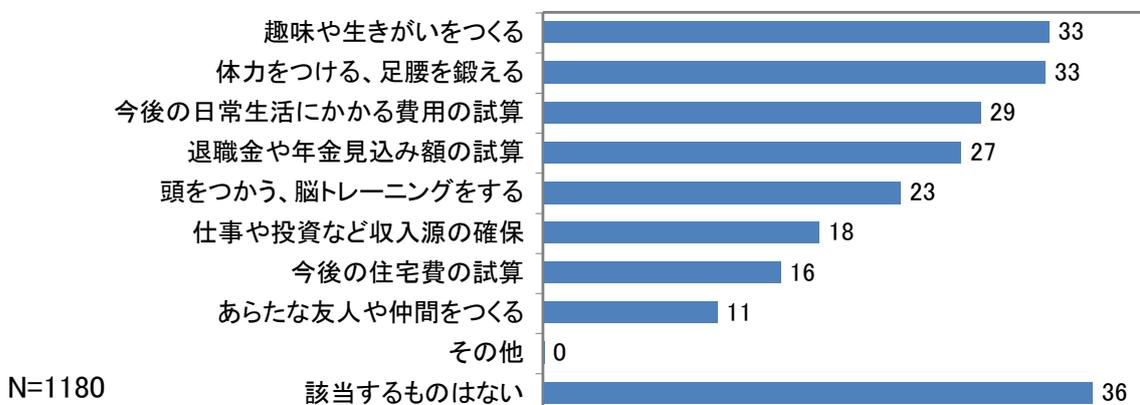
●どの年代も「あと10年仕事を続ける」、就業年齢は上昇傾向

2018年調査では新たに、現在お仕事をされている方を対象に「何才まで仕事を続けますか」という質問を行いました。それによると、50才代は「60代まで仕事を続ける」が75%で、うち65-69才の方が49%となっていました。60代は「70代まで仕事を続ける」が51%、70代は「80才以上まで仕事を続ける」が53%となっていました。



●定年後に向けて「体力」「生きがい」の準備

同じく「定年後に向けて準備していること(退職者は準備していたこと)」について聞きました。その結果、全体で6割以上が定年後の生活に向けて何らかの準備をしていることが分かりました。その結果、「趣味・生きがいづくり」「体力づくり」が3割超で最多となり、「生活費試算」「退職金」など入出金関連が約3割弱、「脳トレ」も2割超となっていました。

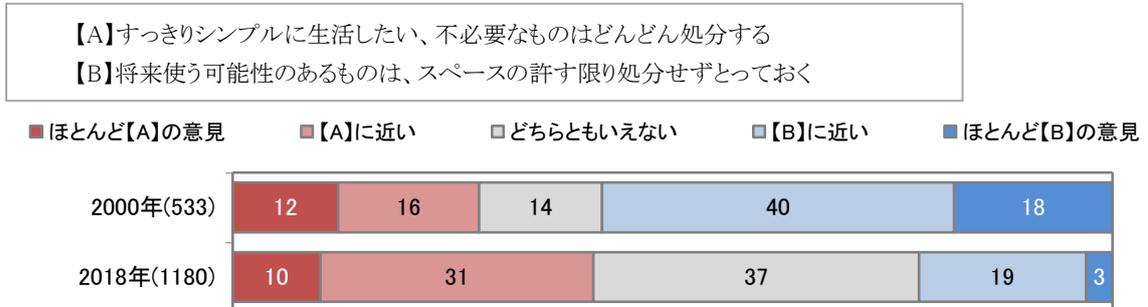


<暮らし・住まいについて>

3. モノを持たない暮らしの志向が増加し、住まいの縮小望む

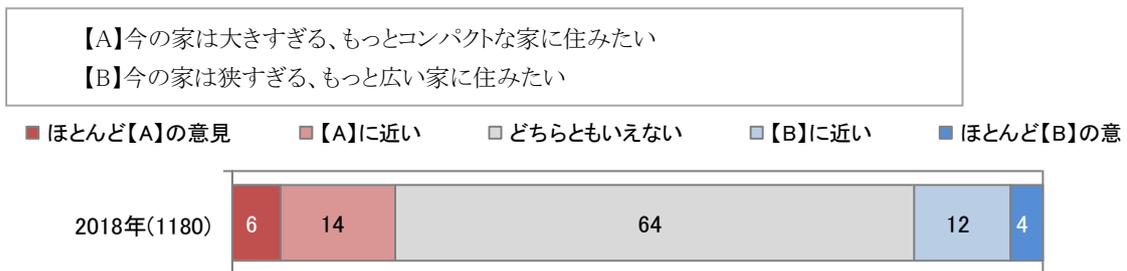
● 「すっきりシンプルに暮らしたい」が増加

モノに関する意識について、【A】「すっきりシンプルに生活したい、 unnecessaryなものはどんどん処分する」、【B】「将来使う可能性のあるものは、スペースの許す限り処分せずとっておく」のどちらを希望するか調べました。2000年調査では【A】系統が28%（【B】系統は58%）でしたが、2018年調査では41%（同22%）に高まっていました。「モノをとっておく」ことから、「モノにしばられない」暮らしへの転換が鮮明な状況です。

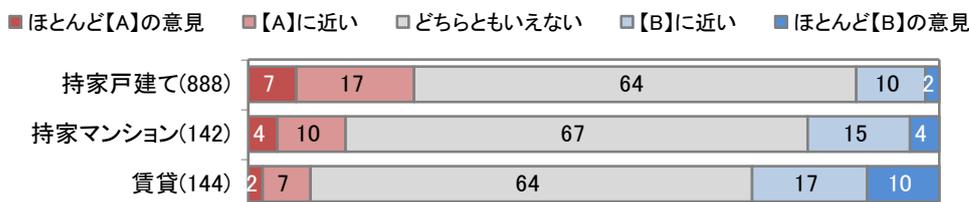


● 「広い家に住みたい」よりも「コンパクトな家に住みたい」が多数

2018年調査では、新たに「住まいの広さ」に関する認識も調べました。【A】「今の家は大きすぎる、もっとコンパクトな家に住みたい」と、【B】「今の家は狭すぎる、もっと広い家に住みたい」から選択してもらったところ、「どちらともいえない」が多くを占めました。【A】系統が20%、【B】系統は16%となり、住まいを縮小する希望が多くなっていました。住居形態別では、特に持家戸建て層では住まい縮小希望が多くなっていました。



<住居形態別>



この件に関するお問い合わせは下記までお願いします
 株式会社住環境研究所 市場調査室 遠藤 TEL. 03-3256-7571
 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町1-1 神田須田町スクエアビル8F